

論文

学習者用仏和辞典を巡る諸問題¹⁾

中尾 浩

要 旨

フランス語の学習者用仏和辞典の重要語や基本語として示されている *および色つき語 (以下, *付き語と称す) についての調査を続けてきた。研究は完全に完了したわけではないが, 大まかなアウトラインが見え始め, *付き語の扱いから, 重要語や基本語とは何か, 学習者用とは何か, といったことがおぼろげながら見え始めた。重要語や基本語の選定は辞書の本来の役割ではないが, これらに対する態度は辞書の根幹にもかかわる問題であることが明らかになりつつある。筆者の最終的な目的はあくまで具体的に個々の重要語や基本語と呼ばれるものを確定する作業であるが, 途中経過として明らかになりつつあることを報告することにする。

キーワード：フランス語, 重要語, 基本語, 語数, 学習者用

1. はじめに

辞書にはさまざまなことがらが求められるが, 何よりも重要なことは情報の正確さである。如何に多くの情報を集録しようとする, その情報が正確さを欠くものであれば意味はない。もちろん, ソシユール的な意味においても, その正確さとはいかなる視点からの正確さであるかは議論の余地はありうるが, 大方の了解事項としての正確さをまずは押さえ

ておく必要がある。

他方において辞書に掲載される情報は種々雑多である。もちろん主となるのは語義記述の正確さで、訳語が間違っていたのでは困る。そして、学習者用辞書であろうとなかろうと、語義記述に際しては必然的に文法的な記述の正確さも要求される。直接目的語を要求しないのに、直接目的語を取ると書いてあったら間違いになる。その他、最近の辞書にはコラムや挿絵などさまざまな工夫が凝らされているが、それらのすべてに対して、正確さが求められることは言うまでもない。そしてその中には重要度情報も含まれる。その言語の母語話者でさえ滅多に使わないような語に重要マークが付けられていたら、正確な情報とは言えないだろう。

筆者は以前から、学習者用仏和辞典の重要度マークに、筆者自身の語感にそぐわないものを感じる事が多々あり、一度、綿密に調査する必要があると感じていた。しかし、いったん手を付け始めると、かなりの時間と労力を要する問題であることがわかった。まだ完全に分析が終わったわけではないが、おおむね先行きが見え始めてきたので、中間報告としてまとめておくことにした。

本稿の性格上、どうしても辞書中の問題点を指摘せざるを得ない。言うまでもなく、本稿の目的は辞書の欠陥をあげつらうことなどでは毛頭なく、どのような問題点があって、どのような解決方法がありうるかを提示することによって、さらなる改善を願ってのことであることをあらかじめ申し上げておく。

2. 基礎データ

本研究はまだ続行中で、完全に分析が終わるには今しばらく時間が必要だが、現時点である程度分析が終わっている日本の学習者用仏和辞典の基礎データは、次の通りである²⁾。

クラウン (C) 三省堂 (第6版)	5,725 語
ディコ (D) 白水社 (第3版)	3,904 語
ジュネス (J) 大修館 (第1版)	4,335 語
プチ・ロワイヤル (P) 旺文社 (第3版)	4,038 語
プチ・ロワイヤル (Pvi) 旺文社 (第4版)	4,320 語 ³⁾
プログレッシブ (S) 小学館 (第1版)	3,516 語
総異なり語数	6,771 語

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

すべての辞書に共通の語	2,764 語
2～4つの辞書に共通の語	1,796 語
4つの辞書にのみ共通の語	729 語
3つの辞書にのみ共通の語	437 語
2つの辞書にのみ共通の語	630 語
1つの辞書にしかない語	2,211 語

なお、本稿ではマーケットシェアの大きいクラウン仏和辞典とプチ・ロワイヤル仏和辞典を中心に優先的に分析を行った。

これらの辞書はすべて「基本語」や「重要語」と称して辞書中にマーキングをしている。クラウンとプチ・ロワイヤルでは以下のように説明されている。

クラウン (第6版)

……, 基本語約 5,000 語を各種の頻度調査や基本語表, 基本語辞典などを参照して選び, もっとも重要な約 400 語は活字を大きくしてアスタリスクを 2 つをつけ, 次に重要な約 800 語は並の活字にアスタリスク 2 個を, 残りの基本単語にはアスタリスク 1 個をつけた。

クラウンのこの説明は非常に不親切である。なぜなら, クラウンは次のプチ・ロワイヤルと同じ区別をしているわけだから,

- 1: **色刷り大ポイント
- 2: **色刷り小ポイント
- 3: *色刷り小ポイント
- 4: *無し色刷り小ポイント
- 5: マーキング無し

と区別すべきである。そしてさらに問題なのは数が合わないことである。これはプチ・ロワイヤルも同じなので, 後ほどまとめて検証する。

プチ・ロワイヤル (第4版)

重要語ランク表示

単語学習の目安として, 以下のランクで表示。

- 1, イロ版大見出し 約 570 語
- 2, イロ版並見出し 約 1,100 語
- 3, イロ版並見出し 約 2,700 語

- 4, イロ版並見出し 約 7,600 語
- 5, スミ版並見出し 約 28,000 語

1 が*二つで色刷り大ポイント, 2 は*二つで色刷り小ポイント, 3 は*一つで色刷り小ポイント, 4 は色刷り小ポイントで*なし, 5 はマーキング無しである。

さて, 先程も述べたとおり, 実はクラウンもプチ・ロワイヤルも基本語や重要語を選んだという割には, 数が不正確なのである。筆者が調査した限りでは, 次の通りになる。

fig. 1 重要度別語数

重要度 ⁴⁾		クラウン	プチ・ロワイヤル
1	**色刷り大ポイント	421	546
2	**色刷り小ポイント	579	938
3	*色刷り小ポイント	4889	2837
4	*無し色刷り小ポイント	3882	8077
	合計	9771	12398

クラウンの説明では最も重要な語は 400 語, 次に重要な語は 800 語のはずだが, 重要度 1 はだいたい合っているとしても, 二番目に重要な語は 800 語あるはずが 580 語しかない⁵⁾。また基本語を約 5,000 語選んだはずだが, 説明通り, アスタリスクの付いた語だけを数えると, およそ 6,000 語になって, 説明より 1,000 語も多いことになる。

クラウンほど数字が違うわけではないが, プチ・ロワイヤルも第 2 ランクは 1,100 語のはずだが 940 語しかないし, 第 4 ランクの語は 7,600 語のはずだが, 8,080 語ある。誤差の範囲内に含めてよいのかどうか, 微妙な数字である。

本稿では「基本語」(クラウン) や「重要語」(プチ・ロワイヤル) と称されているマーキングされた語を中心に見ていく。辞書によって「基本」と称したり「重要」と称してはいるが, 結果的に, *マークの有無, 色刷りの有無の 2 点で無標の語と区別されているので, 何のマーキングもされていない語以外は, 何らかのランク付けによる学習の目安となる有標の語であると見なした。

また, 後ほど定性分析を行う際に, フランスの幼児向け辞書も分析対象にしたので, あ

らかじめ基礎データを示しておく。

基礎データ (2)	
Larousse des Débutants (L)	6,097 語
Robert Benjamin (B)	5,190 語
Hachette Benjamin (H)	6,121 語
総異なり語数	7,166 語
すべての辞書に共通の語	4,644 語
2つの辞書にのみ共通の語	1,030 語
1つの辞書にしかない語	1,416 語

3. 定量的分析 (1)

上記の基礎データに基づいて、少し数値的な問題を考察しておく。

まず、二つの辞書のランキングはどの程度一致しているのだろうか。一致率の計算のしかたにはいくつかあるが、ここでは最も単純な「一致率＝一致数÷(一致数＋不一致の和)」で計算した。それぞれの辞書でランクした語数に違いがあるので、

```
aa bb cc dd          gg
aa      cc dd ee ff
```

このように擬似的な文字列を想定して、一致していない部分を差と考へ、以下のような結果を得た。なお、重要度1が*が二つ色刷り大ポイントで、以下、一つずつランクが下がる。対象としたのはクラウン(第6版)とプチ・ロワイヤル(第4版)である。

二つの辞書で重要度1と判定された一致率	60.36%
二つの辞書で重要度2と判定された一致率	29.22%
二つの辞書で重要度3と判定された一致率	48.70%
二つの辞書で重要度4と判定された一致率	34.22%
二つの辞書全体の一致率	68.56%

同じ利用者をターゲットとした辞書であるにもかかわらず、最重要(基本)語として提

示されている語も、かなり大きな枠組みでとらえていると思われる全体としての一致率も、あまり一致していないようである。数字だけではわかりにくいので、図で考えてみよう。

一般に同じ利用者をターゲットとした重要（基本）語リストであれば、ほぼ重なっているのではないかと予想される。誰もが重要（基本）と考える語を数百から数千選べばよいわけだから、完全に一致はしないまでも、8割から9割くらいは重なっているのではないかと、少なくとも7割程度は重なっているのではないかなどと予想してしまう。つまり、以下のような図を我々は無意識のうちに想定している。

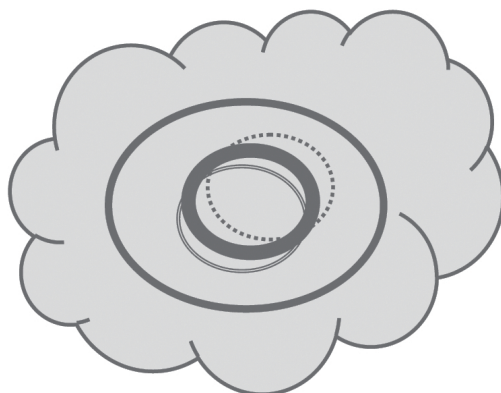


fig. 2 最重要語の期待図

この図は何を表しているかというと、不分明な全体の中にある、理想的な重要度構造（太線の楕円が最重要，中線の楕円が次に重要な語彙）があるとする、その最重要語彙に大部分が重なる形でそれぞれの辞書が重要語を設定している、というのがおそらくは大方の期待する姿だろう。しかし、現実には

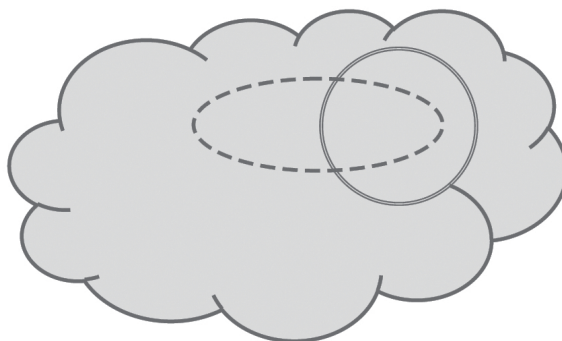


fig. 3 最重要語の現実

二つの辞書で最重要（基本）と思われる部分で重なっているのは半分より少し多いくらいで、それが不分明な全体の中のどのあたりに位置するかもよく分からない。すなわち、本当に重要（基本）な語を選んだのか、そうではない語が多数混じっているのかさえわからない。

このような現象は、語数を絞りすぎたためであると考えてみよう。重要（基本）度1と重要（基本）度2の違いは小さいし、重要（基本）度2と重要（基本）度3の違いも小さいので、とにかく何らかの意味で重要（基本）な語であると見なされたある程度多くの語（マーキングされた語）を1万語前後選べば、もっと一致するはずではなかろうか。

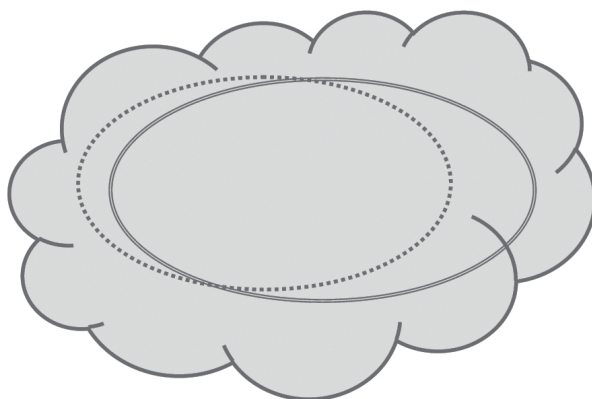


fig. 4 重要語全体の期待図

この図は不分明な全体の中で、二つの辞書が何らかの意味で重要と考えた語のかなりの部分が重なっているはずだ、という期待図である。

ところが残念ながら、1万語前後を選んだ場合でさえ一致率は7割を切っている。

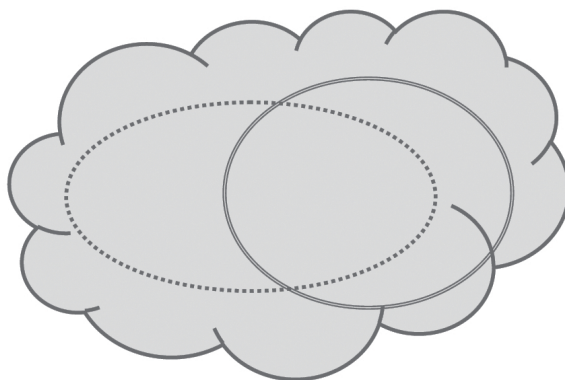


fig. 5 重要語全体の現実

不分明な全体の中で、果たしてそれぞれの辞書がどのように重要さを判定して作成したリストなのかがわからない。

高校生から大学生を中心とした初めてフランス語を学習する人のための重要語なのに、なぜ別々に作られたリストがここまで異なってしまうのだろうか。

ここで確認しておきたいことは、

- 1) マーキングされた語が全体の中のどこに位置しているのかわからない。そもそも全体が不分明なので、全体の中心がどこにあるのかさえ、明確ではない。
- 2) 500 前後選んでも、1 万程度選んでも円は重ならなかった。それぞれの辞書の言い分が拮抗した形になっている。一方が選んだ語なのに、他方の辞書がなぜ選ばなかったのかという合理的な理由を見つけにくい場合が多い。

そもそも、なぜ3,000や5,000語なのか。これらの数の正当性を主張する人の中にはカバー率を盾に取ることが多い。すなわち、3,000語や5,000語あれば、たいていの言語表現であれば80～90%はカバーできる。それはもちろん、コーパス言語学的にも証明されている。

しかし落ち着いて考えてみれば、カバー率は理解率ではない。たとえば、以下のようなフランス語があったとしよう。

Il était une fois un XXXXX dans un petit village.

物語の冒頭などでよく使われるフランス人なら子どもでもおなじみの表現だが、「昔々ある小さな村にXXXXXがいました」で8～9割理解できたことになるのだろうか？XXXXXにはgarçon（少年）が入るかもしれないし、homme（男）が入るかもしれないし、sorcier（魔法使い）が入るかもしれない。garçonとhommeはすべての辞書で第1ランクの単語だが、フランス人の小学生なら誰でも知っているsorcierという語はプチ・ロワイヤルで辛うじて、第4ランク、すなわち12,400語レベル⁶⁾に位置づけられているにすぎない。あるいは日本人にはあまりなじみがないが、フランスの子供向け絵本などを読んでみると実によくアナグマblaireauが出てくる。Il était une fois un blaireau dans un petit village. などフランス人の子どもにとって何の雑作もない文だが、blaireauがわからないばかりにこの文の中心的な情報である、いったい小さな村に何（誰）がいたのかわからない。わからないのはblaireauという1語だけだから⁷⁾、やはり90%は理解できていると考えてよいのだろうか。計算上はそのように定義したとして

も、外国語教育としてこのような考え方を安易に採用することは危険なことではなかろうか。

ジップの法則で有名になったパレート曲線はたしかに、少数の頻出するものが大半を占める、という一般則を明らかにしたが、言語の習得において重要なのは頻出する大半のものだけだろうか。試しに3,000語や5,000語でどれくらいのコミュニケーションが可能か考えてみればよい。政治の話も経済の話も食べ物の話も、ほとんど出来ない。3,000とか5,000といった数字は大きな数字に見えるかもしれないが、本当にそうなのかどうか、きちんと検証する必要がある。

とりあえず、数字の上での分析はここでいったん中断して、次はもう少し中味を見てみよう。

4. 定性的分析

ここまで数値のみを問題にしてきたが、次は内容について若干考察する。もちろん、数千の語を一つ一つ論じるわけにはいかないのだから、いくつか項目を立てて分析してみるが、最終的には一つの問題に収斂することになる。

分析項目

4.1 マーキングに漏れがある

たとえば辞書の中で、un, deux, trois が集録されているのに、quatre が集録されていない、cinq, six, sept と続いていたらどのように思われるだろうか。実に不思議な現象と言わざるを得ないのだが、現実にはそれに類似した*の付け方になっている。

以下の表は、5つの学習者用辞書で数に関係する語を集めて、*を付けられているかどうかを示したものである。○がついていれば辞書中で*が付いていて（重要度がいくつかは問わない）、×がついていれば*がない（重要度は問わない）ものである。○? はなぜ*が付いているのか、理由が不明なもの。×? はなぜ*がないのかが不明なものである。

fig. 6 数字に関する語彙の分析

		C	D	J	P	S
1	un / une	○	○	○	○	○
1 番目の	premier	○	○	○	○	○
1 番目に	premièrement	○	×	×	○	○
2	deux	○	○	○	○	○
2 番目の	deuxième	○	○	○	○	○
2 番目の	second	○	○	○	○	○
2 番目に	deuxièmement	×	×	×	○	× ?
3	trois	○	○	○	○	○
3 番目の	troisième	○	○	○	○	○
3 番目に	troisièmement	×	×	×	○	○
4	quatre	○	○	○	○	○
4 番目の	quatrième	○	○	○	○	○
4 番目に	quatrièmement	×	×	×	○	×
5	cinq	○	○	○	○	○
5 番目の	cinquième	○	○	○	○	× ?
5 番目に	cinquiemment	×	×	×	○	×
6	six	○	○	○	○	○
6 番目の	sixième	○	○	?	○	○
7	sept	○	○	○	○	○
7 番目の	septième	○	○	○	○	○
8	huit	○	○	○	○	○
8 番目の	huitième	○	○	○	○	○
約8	huitaine	○	×	×	×	×
9	neuf	○	○	○	○	○
9 番目の	neuvième	○	○	×	○	○
10	dix	○	○	○	○	○
10 番目の	dixième	○	○	×	○	○
約10	dizaine	○	○	○	○	○
11	onze	○	○	○	○	○
11 番目の	onzième	○	○	×	○	○
12	douze	○	○	○	○	○
12 番目の	douzième	○	○	×	○	× ?
約12	douzaine	○	○	×	○	○
13	treize	○	○	○	○	○
13 番目の	treizième	○	○	×	× ?	○

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

		C	D	J	P	S
14	quatorze	○	○	○	○	○
14番目の	quatorzième	○	○	×	○	○
15	quinze	○	○	○	○	○
15番目の	quinzième	○	○	×	○	○
約15	quinzaine	○	○	×	○	○
16	seize	○	○	○	○	○
16番目の	seizième	○	○	○?	○	○
17	dix-sept	○	○	×	○	○
17番目の	dix-septième	○	○	×	○	×
18	dix-huit	○	○	×	○	○
18番目の	dix-huitième	○	○	×	○	×
19	dix-neuf	○	○	×	○	○
19番目の	dix-neuvième	○	○	×	○	×
20	vingt	○	○	○?	○	○
20番目の	vingtième	○	○	×	○	○
約20	vingtaine	×	×	×	○	×
30	trente	○	○	×	○	○
30番目の	trentième	×	×	×	○	×
約30	trentaine	○	×	×	○	×
40	quarante	○	○	×	○	○
40番目の	quarantième	×	×	×	○	×
約40	quarantaine	○	×	×	×	×
50	cinquante	○	○	×	○	○
50番目の	cinquantième	×	○?	×	○	×
約50	cinquantaine	○	×	×	○	○?
60	soixante	○	○	○?	○	○
60番目の	soixantième	×	×	×	○	○?
約60	soixantaine	○	×	×	×	×
70	soixante-dix	○	○	○?	○	○
70番目の	soixante-dixième	×	×	×	○	○?
80	quatre-vingts	○	○	○?	○	○
80番目の	quatre-vingtième	×	×	×	○	×
90	quatre-vingt-dix	○	×	×	○	○
90番目の	quatre-vingt-dixième	×	×	×	○	×
100	cent	○	○	○	○	○
100番目の	centième	×	×	×	○	×
約100	centaine	○	○	○	○	○

この表を子細に検討すると、不思議な事例がいくつか目につく。たとえばプログレッシブ仏和辞典では一番目にと三番目にを表すフランス語には*が付いているのに、二番目にを表すフランス語 *deuxièmement* には*が付いていない⁸⁾。ディコとジュネスは最初からどれにも*を付けていないので、*がなくても不思議はない、プチ・ロワイヤルは少なくとも5番目まではすべて*を付けてあるので、*があっても不思議はない。しかし、プログレッシブはなぜ二番目だけが飛んでいるのか。これを合理的に説明する理由はあるだろうか。フランス語で2番目にを表す語は極めて使用頻度が低いとか、重要度が低いのだろうか。あるいは、ディコでは30番目、40番目、60番目を表すフランス語には*が付いていない。1～10番目くらいまではよく使うだろうが、40番目や60番目になるとそれほど使うわけではないと考えれば、*が付いていないことは理解できる。しかし、なぜ50番目を表す *cinquantième* にだけ*が付いているのだろうか。確かに50周年 (*cinquantième anniversaire*) のような表現は30周年や40周年に比べればよく使われるかもしれないが、それを理由にあえて50番目にだけ*を付けるのは根拠が薄弱ではなかろうか⁹⁾。

このようなミスは、集録する際に、たとえば「番目にの表現には*を付ける(付けない)」といった集録方針さえ立てておけば防げるミスだと思うが、「二番目に」だけがほとんど出てこなかったり、50番目が非常に頻出するコーパスを分析した結果なのだろうか。

実は数字については切りのいい数字以外も調べてみると、もっと問題点はたくさん出てくるのだが、あまり数字にばかり紙幅を割くわけにもいかないので、次の項目に移ることにする。

4.2 収録語が偏っている

4.2.1 文法的な問題

フランス語に限った話ではないが、フランス語にいくつの品詞があるかを計測することは難しい。そもそもフランス語にいくつの語彙があつて、その中でそれぞれの語彙がどのような品詞であるかを分析することが非常に難しい。ただし、どれほど精密に計測したところで、大まかな割合は変わらないので(一つの調査で名詞が50%で動詞が40%、別の調査では動詞が60%で名詞が30%だとしたら、どちらか一方、あるいは双方とも間違っていると考えるを得ない)ここではインターネット上で公開されている *Lexique* というデータを元におおまかな目安を付けてみたい。

Lexique はパリ第5大学デカルト校で実験心理学を担当している Boris New と INSERM (フランス国立健康医学研究所) の Christophe Pallier によって作成・公開されているフリーの辞書である。今回は最新のデータであるバージョン370を分析した。この語彙リストに

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

はおおよそ13万5千語の延べ語（動詞の活用形などもすべて含めた数値）と5万5千のレンマ（原形）が含まれているそうだが、実際に調べたところ、記述ミスなどを削除した結果、レンマは51125語が残った。辞書の情報に従って、名詞、形容詞、動詞、副詞、その他で分類したところ、次のような構成となった。

Lexique 370の品詞構成

名詞	59.80%
形容詞	23.03%
動詞	12.52%
副詞	3.59%
その他	1.06%

フランス語の品詞構成はおおむね、名詞が60%、形容詞が23%、動詞が12%、副詞が3%程度であることがわかる。

もちろん、基本語彙や重要語彙を選んだ結果がこの構成通りになるとはかぎらない。しかし、この割合を大幅に逸脱するような割合であれば、何らかの合理的かつ正当な理由が必要であって、さしたる理由もなく、名詞と動詞が同じくらい選ばれていたら、リスト作成者の何らかの意思が働いたと考えざるを得ない。

マーキングされたすべての語についてはまだ調査が終わっていないが、クラウンとプチ・ロワイヤルで最重要と見なされた語の品詞構成を調べてみると、以下のようになった。Cはクラウン、Pはプチ・ロワイヤル（第3版）を表している。

	両者一致	Cのみ	Pのみ
名詞	122	159	212
動詞	91	100	122
形容詞	60	65	61
機能語	55	58	83
副詞	36	39	52
合計	364	421	530

数字だけではわかりにくいので、グラフで示すと、次のようになる。

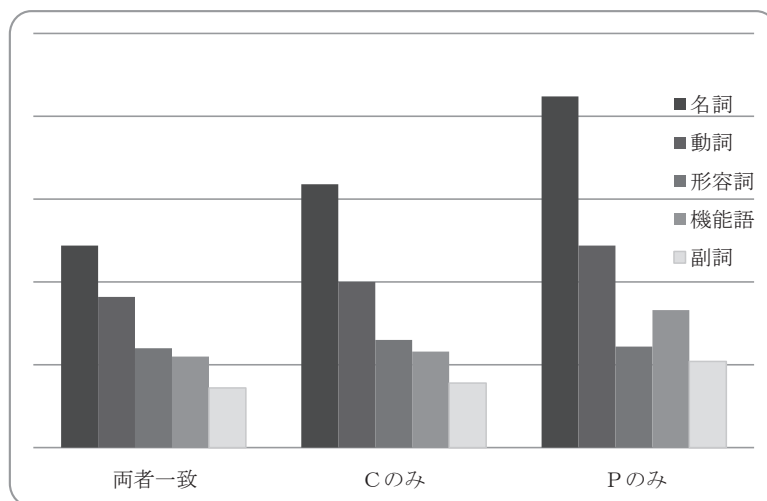


fig. 7 クラウンとプチ・ロワイヤルの品詞構成

プチ・ロワイヤルに至っては、形容詞よりも機能語（冠詞や前置詞）の方が多い。そして、両者で一致した品詞構成はおろか、クラウンのみでもプチ・ロワイヤルのみでも、最重要語として選ばれた語は名詞と名詞以外の語で比べた場合、名詞以外の語の方が多い、という結果になっている。ここには学習語彙選択における文法主義が色濃く反映されていないだろうか？ まずは冠詞や前置詞や動詞を中心に学習させるというのは、明らかに文法解説にその基礎を置いている。第二外国語学習においてはある程度は仕方のないことかもしれないが、フランス語教育においてもコミュニケーション的な方法が積極的に取り入れられている中、辞書の中で重要語とか基本語として示されているのは、相変わらず文法的な説明に必要な語が優先されている。

4.2.2 ジャンルの問題

品詞以上に偏っているのは意味素性である。今回は名詞に限定するが、バランスよく配置されているわけでもないし、偏りに何らかの選択意図が感じられるわけでもない。以下の表を御覧いただくとわかるが、強いて言えば抽象的な語が多く選択され、身近な語が選ばれていない傾向にある。

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

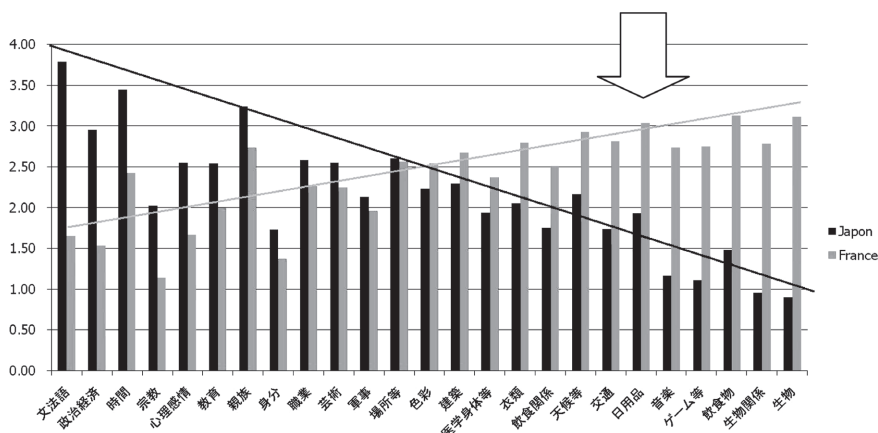


fig. 8 日本とフランスの辞書の集録ジャンル

Japonが日本の学習者用仏和辞典での数値を表し、Franceがフランスの子ども向け辞書での数値を表している。フランスの子供向け辞書では「飲食」「ゲーム」「音楽」（楽器など）、「日用品」といった身近なものが多いのに対して、日本の学習者用仏和辞典で重要語や基本語と称して多く収録されているのは「文法語」「政治経済」「宗教」「心理」といった必ずしも身近とは言えないジャンルである。もちろん、日本人の第2言語学習者が母語話者と同じ順序で語彙を身につける必然性は全く無いが、問題なのは、フランス人が子どもでも知っている言葉を学ぶ機会はいつなのかである。上の図の矢印で表した三角部分がまさしく空白地帯を表している。

4.3 編集方針への疑問

それぞれの辞書には固有の編集方針があり、尊重されなければならない。たとえば訳語にしても、よく使われるものから記述するか、語源にさかのぼって記述するか、などは編集方針次第である。しかし、たとえばある辞書の中で語源にさかのぼって記述されているものもあれば、よく使われるものから記述されているものもあるといった場合には、編集方針とは呼べないだろう。似たようなことが、重要語や基礎語についても言える。たとえばプチ・ロワイヤルはほとんどすべての接頭辞を色刷り（重要度4）にしているが、果たしてほとんどすべてを重要語扱いする必要があるのだろうか。re-やdé-などは、繰り返しや否定を表すといった接頭辞としての役割を覚えていれば便利なことも多いだろうが、たとえば以下のような接頭辞がわざわざ重要度4にランキングされる必要があるだろうか。acét(o)-, arbori-, bary-, bathy-, caco-, call-, céphal(o)-, cruci-, etc.

あまりに多いのでこの程度でやめておくが、これらの接頭辞をわざわざ優先的に学習するメリットは何だろうか。しかも、接頭辞だけ色刷りで、その接頭辞を含んだ表現には全く重み付けられていないケースも多い。たとえば、morph(o)-は色刷りの第4ランクだが、morphèmeもmorphologieも*なし色なしの第5ランクである。接頭辞だけを知っていて、その接頭辞を含む語を知らないというのはいかにも奇妙な話である。この点についてはプチ・ロワイヤルに次いで多くの接頭辞を色刷り扱い（重要度4）にしているデイクについても言えて、たとえば、éthn(o)-は色刷りになっているが、éthnologieやéthnologueは色刷りですらない。接頭辞が重要であるなら、その接頭辞を含んだ語にもそれなりの重要度を認めるべきではなかろうか。

編集方針に関する疑問はいくつかの問題を露呈しているのだが、その一つに固有名詞に対するランキングがある。詳細については改めて別の機会に論じたいが、例えば日本の学習者用仏和辞典で*がつけられている国名（および、その形容詞形や～国人など）がヨーロッパに偏っていることなどは、余りに無邪気な編集方針と言えよう。そのほかにもたとえばプチ・ロワイヤルでLuxembourgは色刷りなのに、Versaillesは色刷りではないといったランク分けがされている。リュクサンブール宮殿（公園）の方がヴェルサイユ宮殿より重要度が上なのだろうか。そもそも固有名詞にランク付け（色づけ、*づけ）をすることに無理があり、辞書のような客観性を要求される記述の編集方針において、リュクサンブール宮殿とヴェルサイユ宮殿のどちらがランクが上かを議論するだけ無意味であることは明らかであり、固有名詞は原則として収録すべきではなく（収録し始めたらキリがないだろう）、例外的に、たとえば国名などは、国連加盟国についてのみ形容詞形と共に収録するといった措置をすべきであって、そうでなければ、ヨーロッパの国については手厚く*がつけられているが、アフリカや南アメリカの国の中にはそもそも収録さえされていない国名が多々あるといったアンバランスが発生することになる。

4.4 単なるミスと思われるケース

残念ながら今回の調査の偶然の産物として間違いをいくつか発見した。筆者は決して校正を目的で精査したわけではないので、校正を目的に精査したらどの程度出てくるのかは何とも言えない。

a：訳語の違い

頻出はしないが、たとえばクラウン第6版でagrèsの訳が（機械）体操用具と訳されているが、器械体操が一般的ではなかろうか。実は第3版以降、クラウンではずっと（機械）体操と訳されている。あるいはプチ・ロワイヤル第4版でdeux-pointの訳語にコロンとあ

るのはよいが、「コロ (;)」という説明は間違いであろう¹⁰⁾。事実、point-virgule には「セミコロ (;)」と書いてある。

その他、訳語の間違いとは言えないが、ロワイヤル (プチ・ロワイヤルではない) で、drague に「撈描」、roquet に「よく吠え犬」、treillis 2 で「鋸打ちたすき紋」とあるが、それぞれ「撈錨」、「よく吠え (る) 犬」、「鋸打ち (し、あるいは、され) たすき紋」の誤りであろう。

b: 掲載順序の間違い

こちらもさすがに頻出するわけではないが、クラウン第6版で élève が先、élevé が後に、また piratage が先、piranha が後に記述されているが、それぞれ、élevé と piranha の方が先ではないか。実は élève と élevé についてはディコとロワイヤル (プチ・ロワイヤルではない) も同じで、プチ・ロワイヤルだけが élevé, élève と正しい順序で記述している¹¹⁾。

c: *の打ち間違い

*の数に多々疑問はあるが、明らかに*があること自体が間違いではないかと思われるものもいくつかある。クラウンで weber (ウェーバー (磁束のSI単位)) のような高度に専門的と思われる語に*が付くのはなぜか。プチ・ロワイヤルで Socrate (ソクラテス) に*が二つもついているのも、明らかに間違いだと思われる。その他、ディコでも*の打ち間違いか色刷りの間違いかのいずれかと思しき箇所がある。caoua, imprudent, nuire, uninominal の4つの語で*が付いているのに色刷りではない (*付き語はすべて色刷りのはずである) といった間違いも見られた。*がついているのが間違いなのか、色刷りでないのが間違いなのか、それ以外の理由があるのかはわからない。

ここまでの定性分析で言えることは、最終的には一点に収斂する。すなわち、データの管理がきちんと出来ていないことである。選んだ語彙をさまざまな観点から吟味していれば、防げるミスも多い。数の表現にせよ、選択の偏りにせよ、データを抽出したり並べ替えてみるだけで、何が抜けているか、何に偏っているかなどは一目瞭然だが、そのような管理がきちんとなされていないのではないかという疑念がある。きちんとデータ管理された上でなおかつ本稿で指摘したようなことが発生したとすれば、もっとと由々しき問題である。

データの管理がきちんと出来ていないために、重要語 (基礎語) の選択のバランスが崩れている。語は独立して存在しているのではないので、ある語に重要度を認めたら、その語に関連する語になぜ重要度を認めないのか (*を付けないのか) といった問題が発生する。その結果、たとえば évidemment や naturellement のような日常的にも非常によく用

いられる副詞が *évidemment* はクラウンで重要度 3, プチ・ロワイヤルで重要度 2, *naturellement* はクラウンで重要度 2, プチ・ロワイヤルで重要度 3 のようないささか理解しがたいランク付けが出来上がってしまう¹²⁾。

副詞に関してさらに言えば、日本の「学習者用」仏和辞典は一般に副詞に対して非常に辛いランク付けをおこなっている。フランス語ではほとんどの副詞が形容詞の女性形に *-ment* を付けることによって得られるのは事実だが、もし、副詞に辛い評価をつける理由が「形容詞を習得すれば副詞も自然と理解できる」という考えに基づいているとすれば¹³⁾、何のための「学習者用」なのかということにならないか。日本のフランス語教育は形容詞さえ習得できれば副詞も自然と理解できるほど高いレベルで行われているのだろうか。

5. 定量的分析 (2)

先の定量的分析 (1) で、そもそもなぜ学習用語彙として 3,000 とか 5,000 を取り立てて示す必要があるのか、ということが浮き彫りにされた。それ以前に、そもそもゴールはどこにあるのか。フランス語に限らず、英語でもドイツ語でも、もっと言えば我々の母語である日本語であっても、語彙をいくら身に付けてもかまわないはずだが、他方においてその言語を使って生活するのに「ほぼ必要最低限」のとりあえずの到達点もあるはずだ。3,000 とか 5,000 といった数字はあたかも到達点であるかのごとく想像させる点が非常に問題である。3,000 とか 5,000 の語彙でフランスで生活するのはほとんど不可能に近いことはフランス語教師なら誰でも知っている。ではどれだけ覚えればよいのか? 青天井なのだろうか?

青天井だと考えることも間違っている。たとえば日本を代表する国語辞典の広辞苑は最新の第六版で公称 24 万項目を超えているそうだ。もちろん、広辞苑に掲載されているのが現代日本語のすべての語彙ではないだろう。しかし、だからといって実は 100 万語もある中で広辞苑は 24 万語しか集録していないなどと考えることも馬鹿げている。恐らく現代日本語 (広辞苑の中には古語もかなり含まれるし、一部の新語や若者言葉など、収録されていないものも当然ある) の語彙の平均的な上限がおおむねこのあたりだということになる。24 万もの語彙を持ち合わせている人が今の日本にどれだけいるだろうか。普通に日常生活をするのに必要な語数は半分の 12 万だろうか、その半分の 6 万だろうか。

この問いも実はトリックである。なぜなら今の日本には 1,000 語程度しか知らない日本人 (幼児) も 5,000 語程度を知っている日本人 (小学生) も広辞苑に掲載されている語ならほとんどわかる言語学者の日本人も齊しく日本語で言語行為をおこなっている。つまり、1,000 語程度の語彙を持ち合わせている幼稚園児同士は当然 1,000 語の範囲内で言語生活

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

をおこない、10万語を知っている人が1,000語しか知らない幼児の相手をする事だってありうるわけである。つまり、第二言語においてどの程度の語数を習得するかは、どのレベルの言語行為に参加できるかにほかならない。第二言語で5,000語しか習得していなかったら、彼の地では5,000語レベルの言語行為しかできない。従って、第二言語教育においては、目標語彙の上限を明確に定めるべきであり、それによってどの程度の言語行為が可能と予見されるかを学習者に対して明示する必要がある。

では、どのあたりを目標語数として設定すべきか。多々議論はあるだろうが、一つの目安になるのは、義務教育を終える年齢あたりの母語話者が習得している、あるいは習得していることが望ましいと思われる数ではなかろうか。

もちろん、現代日本のようにほとんど全員が高校まで進学している国もあれば、国や地域によっては小学校さえ満足に通えないところも多いだろう。そうした個別の事情は多々あろうが、多くの国で15～16歳あたりで、とりあえず義務教育が終わることが多いことを考えれば、建前上、この年齢あたりの人間が持っている語彙の数が、ほぼ必要最低限と考えてよかろう。

いくつか目安になるデータがあるので検討してみよう。国立国語研究所は定期的に各種の語彙調査を行っているが、平成21年に『教育基本語彙の基本的研究・増補改訂版』の増補改訂版解説の中で次のように述べている。

理解語彙量に関して、平成9(2001)年に埼玉県熊谷市の小学校2校、中学校1校の児童・生徒を対象に調査したが、それによると、理解語彙量は次のように発達する。

小学1年生 12,175語
小学2年生 15,765語
小学3年生 19,088語
小学4年生 19,046語
小学5年生 22,309語
小学6年生 30,646語
中学1年生 32,593語
中学2年生 33,049語
中学3年生 39,502語

これは、国立国語研究所の『分類語彙表 増補版』のモニター版 71670語からランダムに200語を抽出して、児童・生徒に「知っている」か「知らないか」を判定させた結果である。このような方法は、たとえば、小学3年生と小学4年生とがほとんど同じとなるように、被験者の認知方略の影響を受けるのであまりいい方法ではないのだが、ひとまずこれを参考にすると、教育基本語彙データベースでも30,000語に足らず、語彙の不足を感じさせる。それに収録している教育基本語彙が古い。改訂の必要があるだろう。

国立国語研究所『教育基本語彙の基本的研究・増補改訂版』平成21年

目安にしなければならないかもしれないが、もしこの調査の半分程度と見なしても、小学1年生で6,000語ほど、中学3年生で20,000語程度の理解語彙はあることになる。

残念ながらフランス語圏でこのような公的な調査を見つけることが出来なかった。ただし、Cellier M. et al. (2008)によると、6歳までに10,000語、教養ある成人で20,000～30,000語程度を習得していると思われるという記述はある¹⁴⁾。ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages, フランス語ではCadre européen commun de référence pour les langues (以下、フランス語の略称のCECRと略))が外国語としての学習者のための基準作りに着手しているが、残念ながらフランス語の全貌はまだ明らかになっていない。CECRでの指針が早く明らかになることを期待したいが、現時点では日本語から類推するしかない。一般的にフランス語の場合、日本語より必要な語彙は若干少なめと考えられている。というより、日本語が他の欧米諸国語に比べて、必要な語彙数がやや多めであると言われている。しかし、ここも思い切って日本語の半分と仮定してみよう。すると、日本の小学1年生に相当する学齢 (CP) のフランス人で3,000語、中学4年生 (4ème) で10,000語は知っていることになる¹⁵⁾。

この仮定はかなり大胆な数である。しかし、ここまで大胆な割引をしても、3,000語や5,000語では、フランス人の小学生並みであることがよくわかるだろう。外国語の語彙学習はここで止めてはならない。フランス語に限らず、英語でも何語でも、2,000～5,000程度の単語集や単語帳は多数あるが、ほとんどはそこで打ち切られて、そこであたかも学習終了となっている¹⁶⁾。これは語彙教育としては非常に憂慮すべき事態である。従来の外国語学習における語彙指導は総枠が明示されてこなかった。いたずらに3,000語とか5,000語という数字だけが独り歩きして、何千も暗記してすごい！といった印象を与えてきた。自分は日本語なら数万の語彙が操れるのに、である。母語ならそれだけの言語行為が可能なのに、外国語になると3,000や5,000程度しか習得していないので (これは学習者の怠慢というより指導不足の影響の方が大きい)、何も話せない、聞いてもわからないと落ち込んでしまう¹⁷⁾。

そして、計算の仕方もたいていは間違っている。たとえばビジネスシーンに必要な語彙3,000とか5,000で確かにかなり多くのビジネス書やビジネス雑誌が読めるかもしれない。ビジネス会話にも大いに役立つだろう。しかし、そうしたビジネス誌を読んでいるネイティブはビジネス誌に出てくる3,000や5,000語しか知らないわけではない。中学生の教科書を読んで、100%とは言わないまでも、ほとんどは理解できる。そうしたバックボーンの上にある3,000語とか5,000語であることを忘れてはならない。そして、当然のことながら、ビジネスシーンでよく使われる3,000語と中学生の教科書の語彙は「ずれ」ている。英語だけでなく日本語でもフランス語でも。

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

この仮説にはもう一つ傍証がある。日仏英の三カ国の子供向け辞書を見ると、収録語数がおおむね一致しているのだ。もちろん、対象年齢の子供が全員それらの言葉を知っているというより、努力目標と考えた方が妥当だと思われるが、とはいえ、お互いに無関係な三カ国で努力目標が一致しているというのは単なる偶然ではない。具体的なデータを提示しよう。なお、いずれも厳密に調査した数値ではなく、辞書の裏表紙などに記載された公称値である。

fig. 9 日本の子ども向け辞書

書名	語数	対象年齢
こどもにほんごじてん	900	7-9 ans
こどもこくごじてん	1,200	7-9 ans
くもんのことば絵じてん	1,500	2-6 ans
こどもことば絵じてん	2,904	(3-6 ans)
角川こどもえじてん	3,000	(4-8 ans)
こどもこくごじてん	3,100	3-6 ans
学習国語新辞典	19,000	小学生向け
学習国語辞典	23,000	小学生向け
チャレンジ小学国語辞典	25,000	小学生向け
小学国語学習辞典	25,000	小学生向け
小学新国語辞典	33,000	小学生向け
例解小学国語辞典	33,000	小学生向け
例解学習国語辞典	33,000	小学生向け
新レインボー小学国語辞典	35,000	小学生向け
学習新国語辞典	34,000	小学生向け
新版小学国語学習辞典	35,000	小学生向け

fig. 10 フランスの子ども向け辞書¹⁸⁾

書名	語数	対象年齢
Mon premier grand dictionnaire	500	4-7 ans
Mon premier dictionnaire	1,700	3-6 ans
Gallimard JEUNESSE	2,000	4-7 ans
Larousse des MATERNELLES	2,000	4-6 ans
Mon premier Larousse	2,000	4-7 ans
Le PETIT Fleurus	5,000	5-8 ans
Mon dictionnaire pour la Grande École	5,000	dès 7 ans
Hachette BENJAMIN	6,000	6-8 ans
Le Robert BENJAMIN	6,000	6-8 ans
Larousse DÉBUTANT	6,500	6-8 ans
Le Robert BENJAMIN	6,500	6-8 ans
Auzou - DÉBUTANT 2009	7,000	?
Auzou - DÉBUTANT 2008	8,000	5-8 ans
Hachette JUNIOR	20,000	8-11 ans
Larousse JUNIOR	20,000	7-11 ans
Le Robert JUNIOR	20,000	8-11 ans
Larousse MAXI DÉBUTANT	20,000	7-10 ans
Fleurus JUNIOR	20,000	8-12 ans
Larousse super MAJOR	23,000	9-12 ans
Auzou - JUNIOR	30,000	7-11 ans
Hachette COLLÈGE	33,000	10-15 ans
Le Robert COLLÈGE	40,000	11-15 ans
Larousse du COLLÈGE	41,000	11-15 ans
Le Robert & CLE International	22,000	apprenants adolescents ou adultes

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

fig. 11 英語の子ども向け辞書（主としてイギリスとアメリカ）

書名	語数	対象年齢
Junior Dictionary	1,300	age 5+
Junior Illustrated Dictionary	3,000	ages 5-7
DK Dictionary	3,000	ages 5-7
The American Heritage First Dictionary	2,000	ages 5-8
MacMillan First Dictionary	5,000	ages 5-8
DK Children's Illustrated Dictionary	5,000	age 7+
Collins Junior Dictionary	5,000	age 7+
Oxford Junior Illustrated Dictionary	10,000	age 7+
Oxford Junior Dictionary	10,000	age 7+
The Junior School Dictionary	25,000	age 8+
The American Heritage Children's Dictionary	25,000	ages 8-11
Merriam-Webster's Dictionary for Children	36,000	ages 8-11
Merriam-Webster's Elementary Dictionary	36,000	ages 8-11
Chambers Student's Dictionary	35,000	ages 14+

少なくとも日仏英の3言語では小学校を卒業するころ（12歳前後）までに2万語前後、義務教育を終了するころ（15歳前後）までに3～4万前後の語彙を習得していることが望ましいと考えられていると読み取れる。したがって、第2言語としての必要最低限の語彙数もおよそ2～4万語のあたりではないかと思われる。少なくともネイティブの子どもはこれくらいの数の言葉は知っていると考えないと、我々は確たる根拠もなく低い目標で満足していることになる。3,000から5,000程度の語彙数では小学校入学以前と同じレベルになってしまう。

言うまでもないことだが、教育的な配慮から言えば、いきなり2万前後の語を順序もなく学習者に対して提示することは何の効果もない。従前、3,000や5,000といった数が選ばれてきた最大の理由は、学習者の負担を考えてのことであろう。確かに外国語の単語を数千も習得することは大変なことである。しかし、ある外国語を習得するとはまさしくその壁を乗り越えることに他ならず、1,000や2,000の単語で十分であれば誰も苦勞はしない。もちろん、外国語の習得とは単語の暗記だけではないが、文法指導、発音指導、などの語学教育におけるさまざまなパートの中の一つである語彙指導の観点から考えると、必

要な語数を明示した上で、それをどの順序で、どのように習得すればよいかを考えるのが教育や教師の役割ではなかろうか。単語学習、語彙学習と聞くと、すぐに詰め込み式の丸暗記を想像してしまうが、語彙学習＝丸暗記ではない。楽しくて覚えやすくして忘れにくいような学習方法を考えることこそ、教師の仕事の一つではなかろうか。

この段階ではコーパス言語学は無力である。ある言語の母語話者がどのように語彙を習得していったかをトレースすることは可能かもしれない。細かく特定共時的にコーパスを構築して、そこにある動的なつながりを探れば、ある程度母語話者の語彙習得過程も明らかになるかもしれない。しかし、それはあくまで母語話者の語彙習得シミュレーションであって、外国語としての学習者の語彙習得シミュレーションが全く同じであって良いかどうかは疑問である。コーパスに分析可能なのは特定共時的な分析だけである。外国語としての語彙習得のためにはどうしてもコーパス分析による知見以外の要素が必要になってくる。

もちろん、日本人の大学生の学習者が、フランス人が子どもの時に覚えた語から順に学習していくというのは、一つの方法ではある。しかし、それがいくつもありうる方法の一つに過ぎないことも明らかである。そもそも英語であろうとフランス語であろうと従来の外国語学習において、この方法が主流になったことはない。

何らかの学習目標等によって学習順序はいくつもありうるが、ある方法において、まず第一に覚えなければならない語が別の方法においては必ずしも第一とは限らない。たとえば従来の単語集などでは大量の文法語が含まれているが、果たして最初に前置詞をたくさん覚えた方がいいのか、それとも身の回りの物品の名詞から覚えた方がいいのかは議論の分かれるところである。そして、そのような議論がどうしても必要であり、これを繰り返していく内に、いくつかの有効な方法が残ることになるだろう。その方法を議論するためにもどうしても3,000や5,000の基本語彙ではなく、必要最低限の総枠が必要である。

6. 終わりに

以上ご覧頂いた通り、本稿では、もっぱら学習者用仏和辞書の有標語彙のみを扱った。辞書の価値はそれだけで決まるものではない。また、マーキングをしていない辞書も多数存在するので、本稿で扱った指標だけで辞書の価値を測ることは不可能である。辞書の最も重要な部分は語義の定義に存するわけだから、その優劣を論じるのが本筋かもしれない。

ただ、本論中で何度も確認した通り、もしデータをもっと厳密に管理していれば防げたミスが辞書の3分の1から半分近くを占める有標語彙の中に散見されたということは、他の無標の語彙にも同じミスが犯されている可能性は否定できないわけである。事実、無標

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

の語の中に、なぜ無標なのか理解に苦しむものもあるわけだから、当然、それらの分析はここでは十分にはされていない。そもそもマーキングというフィルタに引っ掛からないことが問題なので、そのようなミスがどれくらいあるかは別の調査方法で調べるしかない。

辞書の価値や正確性がどこにあるかを十全に語ることは難しいが、読者にいかに正確な情報を伝えるか、という点に関して言えば、日本の学習者用仏和辞典にはまだまだ改良の余地があることは確かなようである。

本研究では具体的な語彙のリストの提示にまで至らなかった。調査はすでに半分くらいは終わっているが、客観的な批評に耐えうるリストの完成にはもう少し時間がかかる。私が本当に提示したいのは、「おおむね 20,000 語」のような単なる数字ではなく、あくまで具体的な個々の語とその厳密な数である。それが 23,523 語になるか、19,352 語になるかは現時点では何とも言えないが、可能な限り早急に完成を目指したいと思っている。

参考文献

- 『クラウン仏和辞典』(第6版)(2010),三省堂。
『プチ・ロワイヤル仏和辞典』(第3版)(2003),旺文社。
『プチ・ロワイヤル仏和辞典』(第4版)(2010),旺文社。
『ディコ仏和辞典』(第3版)(2006),白水社。
『プログレッシブ仏和辞典』(第1版)(1993),小学館。
『プログレッシブ仏和辞典』(第2版)(2008),小学館。
『ジュネス仏和辞典』(第1版)(1993),大修館書店。
『ロワイヤル仏和中辞典』(第2版)(2005),旺文社。
『広辞苑』(第6版)(2008),岩波書店。
Josette Rey-Debove et al. (1999), *Dictionnaire du français*, Le Robert & CLE international.
Larousse des Débutant (2005), Larousse.
Robert Benjamin (2006), Le Robert.
Hachette Benjamin (2004), Hachette.
- Ballard M. et al. (2007), *Les corpus en linguistique et en Traductologie*, Artois Presses Université Traductologie.
Bavoux C. et al. (2008), *Le français des dictionnaires*, Duculot.
Cappeau P. et al. (2004), *Autour du corpus de référence du français parlé*, PUF.
Cellier M. et al (2008), *Guide pour enseigner le vocabulaire à l'école primaire*, RETZ.
Coady J. et al. (1997), *Second Language Vocabulary Acquisition*, Cambridge Univ. Press.

Frey C. et al. (1997), *Le corpus lexicographique*, Duculot.

Leech G. et al. (2001) *Word Frequencies in Written and Spoken English based on the British National Corpus*, Andrew Wilson.

甲斐陸郎（監修）（2005），『小学校国語 語彙指導の方法 語彙表編』，光村図書。

計量国語学会編（2009），『計量国語学事典』，朝倉書店。

言語処理学会編（2009），『言語処理学事典』，共立出版。

国立国語研究所（2001），『国立国語研究所報告 116，日本語基本語彙—文献改題と研究—』，明治書院。

国立国語研究所（2001），『国立国語研究所報告 117，教育基本語彙の基本的研究—教育基本語彙データベースの作成—』，明治書院。

独立行政法人 国立国語研究所（2009），『国立国語研究所報告 127，教育基本語彙の基本的研究—増補改訂版—』，明治書院。

春山陽一（2007），『ネイティブの小学生なら誰でも知っている英単語 10000 語チェックブック』，ダイアモンド社。

宮地裕・甲斐陸郎編（2008），『「日本語学」特集テーマ別ファイル 語彙 1』，明治書院。

宮地裕・甲斐陸郎編（2008），『「日本語学」特集テーマ別ファイル 語彙 2』，明治書院。

吉島茂編／大橋理枝他訳（2004），『外国語教育 II 外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠』，朝日出版社。

注

- 1) 本稿は2011年3月刊行の愛知大学学内共同研究B-30『テキストの権威性についての東西比較—文字・テキストについての歴史的・理論的考察—』に収録した「辞書の権威とは何か—学習者用仏和辞典を手掛かりに一」に加筆訂正したものである。
- 2) データの提示などにおいて，クラウンの代わりにCの記号を用いることもある。
- 3) 本研究遂行中にプチ・ロワイヤルとプログレッシブの新しい版が出た。プチ・ロワイヤルについては可能な限り新しい第4版に基づいて分析を行った。
- 4) 以下，今後，重要度1と言え，クラウンあるいはプチ・ロワイヤルで**色刷り大ポイントを表し，以下同様と考えることにする。
- 5) 辞書によっては，名詞や形容詞の男性形と女性形を別々にカウントすることもあるので，580語の中の女性形を持つものは別に加えれば800に近付くのかもしれない。また，見出し語以外に熟語，慣用表現などにも*が付けられており，今回の調査ではいくつかの理由によりカウントしなかったが，これらも含めればまた数値は変わってくる。いずれにせよ，それぞれの辞書においてカウントの基準が明記されていないのも事実である。
- 6) 辞書では第4ランクの7,200語に含まれる語と記されているが，第1ランクから順に足していけば，この語はトータルでは上位12,400語位までに出てくる語となる。フランス語を学習する日本人の大学生や高校生にとってsorcierという語が重要かどうかは議論が分かれるところだろうが，日本語なら対象学習者であれば誰でも理解できる言葉がフランス語では重要度が最下位ランクである事態を放置し

学習者用仏和辞典を巡る諸問題

ておいて良いのか、というのが問題提起の一つでもある。

7) 残念ながら、日本の学習者用仏和辞典でblaireauに何らかのマーキングを施した辞書は一つもない。

8) 第2版でもpremièrementとtroisièmementには*が付いているが、deuxièmementには*がないままである。

9) 事実、手持ちのコーパスを分析してみても、ずば抜けて50番目が多用されているわけではない。

○quinzième	6761
○cinquantième	5736
○seizième	5264
○quatorzième	4910
×trentième	3819
×quarantième	2220
○huitaine	2009
×soixantième	1949

同一のコーパス内での頻度から考えても、ランキングの根拠が曖昧である。

10) 正しくは()である。

11) その後、少々気になって調べたところ、辞書によってélevéとélèveの順序がかなりまちまちで、élève → **élevé**の順に並べてある辞書が意外と多いことがわかった。もう少し詳しく調べる必要がありそうである。

クラウン：élève → **élevé**

プチ・ロワイヤル (第3, 4版)：élevé → élève

ディコ：élève → **élevé**

プログレッシブ (第1, 2版)：élevé → élève

ジュネス：élève → **élevé**

新スタンダード仏和辞典：élève → **élevé**

ロワイヤル仏和中辞典：élève → **élevé**

白水社仏和大辞典：élève → **élevé**

ロベール仏和大辞典：élève → **élevé**

Le Petit Robert 1994：élevé → élève

Le Petit Robert 2011：élève → **élevé**

Flammarion de la langue française：élevé → élève

Dictionnaire AUZU：élève → **élevé**

Le Robert et Clé international：élève → **élevé**

Le Grand Robert：élève → **élevé**

Le Grand Larousse：élevéなし

12) 言うまでもないことだが、コーパスで調べてもこの二つの語は重要度1に値するほど高頻度で使われている。

13) それ以外に、非常に高頻度で用いられる副詞のランクが低い理由には何がありうるだろうか。

14) Cellierのこの記述のソースとなったBassanoの«La constitution du lexique : le développement lexical précoce» in L'Acquisition du langageは残念ながら筆者は未見である。

- 15) フランスの学校制度は5-4-3制なので、小学校6年生がない代わりに、中学校4年生が日本の中学校3年生と同じ年齢となる。
- 16) この観点から言えば、たとえば春山陽一の『ネイティブの小学生なら誰でも知っている英単語10000チェックブック』ダイヤモンド社、2007年などは貴重な参考書である。ただし、残念ながら春山もこの10,000語が第2言語としての英語習得にとっておおむね必要最低限の数字なのかどうかは述べていない。あくまでネイティブなら小学生でも知っている、という基準で選んでいるようだ。
- 17) さらに問題なのは、たとえば3,000語程度を習得している母語話者と3,000語程度を習得している第二言語学習者の中味が違うことである。つまり、3,000語を習得している母語話者の子どもでも知っている語を第二言語学習者は知らず、逆に母語話者の子どもは知らない語を第二言語学習者が知っているので、話がなかなか噛み合わないことも恐らく多くのフランス語教師が体験上知っているはずである。この点については別の機会に詳しく論じてみたいと思う。
- 18) 厳密には、フランス語の辞書の場合、7,000 motsと書いてあったり、7,000 définitions, 7,000 noms communsといった具合に表現が一定しないが、いずれも日本語で言うところの見出し語とみなした。同じ事は英語にも言えて、wordsが使われていることもあれば、entriesが使われていることもある。